みやもとだより

第13号　平成28年2月発行

季節のおまつり

黒川能（王祇祭）

出羽三山の西麓、鶴岡市の黒川には江戸期以前から古式の能が伝えられている。厳冬の神事能を初めて見に行った時、雪の夜の幽玄な雰囲気の中でひと際冴えた笛や鼓の音に深い感銘を受けたのを覚えている。村里の鎮守春日神社の氏子で、上座と下座二つの宮座を形づくって、お互いに競いあい結束して守ってきた。中世より歴代領主の庇護も厚く受けてきた。

中央からどのように伝わったのかは諸説あるが、その後独自に発展してきた黒川能が五百年以上も継承され、その演目も両座合わせて能が五百余番、狂言が五十番あり、現在の能五流では既に廃絶した演目や演式が残っている。

旧正月に当たる二月一日、両座それぞれの当屋が神社から御神体の王祇様をお迎えしたあと、「振舞い（宴会）」や「座狩り（点呼）」などの儀式が行われる。裃姿の能役者たちが、世襲の家の屋号で何々左衛門あるいは何兵衛という名で読み上げられるさまは、歴史の古さを感じさせられる。

午後六時頃、当屋の一部屋を能舞台とし蝋燭がゆらめく中、稚児が初春を寿ぐ「大地踏」を演じ、続いて能役者たちによる「式三番」が舞われる。上座の白式尉と下座の黒式尉の面は御神体で、それをつけた者には神格が宿ると言われる。大地踏と式三番は能大成以前の形とも言われ、芸能に祈りの姿が込められていると言える。

当屋で夜空けまで能五番、狂言四番が演じられると、翌朝、両当屋のそれぞれの王祇様を奉じて競争で春日神社へ宮のぼりする。拝殿の能舞台では、前夜同様の能が上座、下座各一番と両座立会いの大地踏、式三番が行われる。その舞は人々の心を喜びで満たし、来る春も幸多いことを願うものである。鎮魂の儀式ということも後から加わっている。

（写真・文　宮本卯之助）

当屋での式三番

春日神社拝殿の能舞台（後方は王祇様）

この国の佳き伝統とともに
宮本卯之助

浅草徒然につき

職人と半纏

祭りに生きる人たちの晴れ姿。見れば自然に心が躍りだす祭半纏。祭りを支える人たちの半纏は、元々江戸の頃より、職人または丁稚さんなどの仕事着として使われていました。木綿製の筒袖で襟にはその店の名、背中には屋号を染め抜き、印半纏とも言われました。祭半纏には町名を入れる違いはあっても同じような作りです。尚、職人の第一正装は黒股引に半纏姿であり、今でも特別な時には羽織られています。浅草は江戸時代より職人が多く住み、三社祭で賑わう町です。今も昔も、浅草は半纏姿が似合う町です。写真は大正十三年、弊店の前で撮影されたものです。

古典芸能へのとびら

大向こう

初めて劇場に赴き、畏まった気持ちで歌舞伎を観ていると、何やら上階から大きな掛け声が。歌舞伎を盛り上げるのは、つけ打ちや下座音楽だけではありません。劇場の一番奥、上階席からかかる掛け声は、大向こうと呼ばれています。役者が見得を切り、バッタリとつけ木の音が入ったところに「中村屋！」とくれば、これぞ歌舞伎という雰囲気。観客も自然と気持ちが盛り上がります。中村屋、成田屋といった役者の屋号の他にも、町名や名跡の代数、時には「待ってました」の一言などがあります。舞台初日から役者と大向こうとの呼吸はぴったりで、ここぞというタイミングで聞こえてきます。劇場に足を運んでみると、公演中は面白い台詞に笑い、切ない場面に涙し、感動をした場面に拍手を送り、の連続です。舞台と観客とが一体となって楽しめる、それは歌舞伎の醍醐味の一つです。

神輿むかしばなし

三つ巴

神輿の屋根、台輪、吹返など、各パーツには紋様が施されています。中でも広く伝わっているのが三つ巴です。神輿発祥の地である宇佐神社のご神紋、三つ巴に由来しています。

巴紋は水を表すとされており、火伏せの意味が込められ、古くより神社の屋根瓦などに用いられてきました。また、勾玉のような形は、弓矢を射るときに着けられた武具、鞆（とも）を象ったものと考えられています。稲荷神社では稲紋、天満宮では梅紋というように、神社でお祀りされる神様にもとづいて紋様を付けることもありますが、特にご指定のない場合は、神輿の起源に倣い、三つ巴をご案内しております。神輿の三つ巴には、一三〇〇年の由緒が込められているのです。

「私も父親に連れて行ってもらったから、お前は私が連れて行きたいと思って」と入社して数年経った頃に父親に連れて行かれたのが今回取り上げさせて頂いた黒川能でした。鶴岡駅を下車して現地に入ると、膝下まで雪に埋まる豪雪地帯。夜も更けて当屋の板の間に正座しながら見た能は忘れられない。庄内地方特有の言い回しである謡や、子供の演じる脇方が眠気と戦うのどかな姿に、生活文化として根付いた芸能の持つ奥深い力を感じたのを覚えている。洗練された都会の舞台芸能の価値は勿論だが、原初の姿をどこかに残す郷土芸能はこの国の誇る掛け替えのない宝だと思う。

父と二人旅に出たのは数える程だが、芸能の根源にある祭る力を見せてもらった事に感謝している。いつか我が子を連れて同じように黒川能を訪れる日を密かに楽しみにしている。

代表取締役社長
宮本芳彦

発行
株式会社 宮本卯之助商店
企画広報室
〒一一一－〇〇三五
東京都台東区西浅草 二－一－一
電話 〇三－三八四四－二一四一
www.miyamoto-unosuke.co.jp